

古写真に魅せられて30年



長崎外国語大学 姫野 順一

(副学長・特任教授・新長崎学研究センター長・
長崎大学名誉教授)

長崎ケーブルメディア（NCM）の情報番組「なんでんカフェ」で「NAGASAKI古写真いぶらりー」を始めて7年目になりました。NBC長崎放送でも月に1回放映されています。昨年は、古写真研究の集大成となる「写真発祥地の原風景長崎」展を東京都写真美術館と長崎歴史文化博物館で開催できました。長崎の歴史空間を写真により表象空間として再現する試みでした。長崎大学のホームカミングデーでもこの延長上に「古写真に見る幕末明治の長崎の都市空間 ～異域長崎の表象と文化」として、長崎の歴史空間をデジタル画像で再現させました。今回古写真についての寄稿を依頼された機会に、長崎大学および長崎外国語大学で取り組む、古写真の収集・保存・公開の30年を振り返り、古写真研究の困難と開拓、長崎における写真の歴史、急速に進むデジタル化の意義と先端の研究について紹介させていただきます。

1. 長崎大学の古写真コレクション

過去の写真はすべて古写真です。その意味で「古写真」は初期写真と言う方が正確なのですが、私たちはこれまで古写真を「幕末明治に職業的な写真家により撮影された写真群」と定義してきました。最近は、大正から昭和にかけての古写真も収集され始めましたので、学問的には厳密な定義が必要となってきたようですが、ここでは古写真を初期写真としておきます。

長崎大学附属図書館は、日本古写真を「幕末・明治期日本古写真コレクション」として約7,700点収蔵しています。これは幕末から明治期にかけて日本各地で撮影されたものです。国内最大級の古写真コレクションです。長崎大学は1988年に古写真のコレクションを始めました。今年で30周年を迎えます。附属図書館は、写真という新しい研究メディアの整理に苦勞しました。写真の整理と公開作業は開拓的な仕事でした。収集を続けるととも

に、この間、収集された古写真の目録化、解説の付加、データベース化、電子情報化、英語による国際化、超高精細画像データベースの開発、さらに国際的に汎用なメタデータベース開発が進められました。

収集を始めた1988年、文部省大型コレクション補助事業によりコアとなる1500枚の写真が購入されました。長崎大学文教キャンパスに個性あるコレクションがあればと期待していたためです。専門家がいなかったため整理が大変でした。これが経済学史研究を専門としていた私が古写真研究に入り込むきっかけでした。古写真の保管・整理・公開・活用については、先行の収蔵研究機関であったオランダのライデン大学写真研究センター、日本大学芸術学部写真学科、横浜開港資料館の経験から学びました。

写真は熱や湿気、光といった物理刺激で劣化します。そのため保守（コンサーベーション）は難しい問題でした。日本は温度と湿気が高く、四季の変化があるため、写真の保存環境に向いていません。そこで長崎大学では、日本古来の通気性に富んだ桐箱を調達し、さらに温度・湿度・照度が調整できる博物館仕様の古写真資料室を整備しました。1989年に最初の「幕末・明治期日本古写真データベース」が完成しています。

目録化は最初の課題でした。整理する項目が図書分類とは違っていたからです。撮影者・撮影場所・撮影時期・撮影対象が古写真分類に必要な項目として絞り込まれました。写真の被写体は人物・風景・風俗に分類されます。

これらの画像を誰に解説してもらうかが問題でした。これは写された場所や人物に詳しい地元の学芸員や郷土史の方の協力を仰ぎました。場所の特定や、風俗の意味などは市民の指摘が有益でした。古写真研究は最初から研究者と市民の協働作業だったわけです。間違いの指摘はありがたいのですが、自説を強要される場合は悩まされました。電子情報化は、コレクションを最初に購入した時点で、イギリスのケンブリッジ大学に留学していた時に訪問できたオランダのライデン大学のムースハルト博士から提言されました。当時、写真画像情報の電子化は、現物を保存して電子画像を一般公開する目的でした。この時は、大型コンピューターに画像を取り込んで端末から閲覧する計画でしたが、画像情報の電送技術が未熟なため受信に時間を要しました。これが解決するのはインターネットの登場を待たねばなりませんでした。データベースが完成した段階で、目録と解説の英語化を進めました。古写真の画像は文字に抵抗がある外国人にも受け入れやすいものでした。アクセスが容易であれば、日本文化に触れてもらう有力なメディアであると思われました。

1990年代の終わりに登場したインターネットは地方大学の神風でした。中央の大型コンピューターに頼らなくても、地方大学から簡単に世界に向けて情報発信できるようになったからです。

2005年度に構築された「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」は、長崎大学附属図書館を拠点に世界の収蔵機関を

ネットで繋ぐ国際共同の電子図書館を目指すものでした。最初のデータベースを引き継ぎ、画面デザインを一新し、新たにDublin Core（メタデータの国際標準セット）に準拠したメタデータを作成しました。これにより、さまざまな電子図書館システムやデジタルアーカイブシステムから長崎大学附属図書館所蔵古写真コ

レクションのデータを横断検索することが可能となりました。2006年度には科学研究費補助金で超高精細画像データベースの製作に挑戦しました。ネットで10倍まで拡大した古写真を閲覧出来るものです。この開発は、アメリカのゲーム開発の先端にあった画像転送技術を導入するものでしたが、岡林隆敏教授(当時)の貢献には大きいものでありました。超高精細データベースは、長崎写真201点その他の全国の写真300点を収録しています。これにより写真の細部を世界のどこからでも視認できるツールが完成したわけです。写真の細部をいつでも、世界のどこからでも視認できるという環境が整ったことで、古写真研究は飛躍的に進みました。こうして長崎大学の古写真コレクションはオンラインにより世界

写真1 長崎大学古写真コレクション HPの写真

HOME > 資料を探す > 長崎大学電子化コレクション

2017/02/28 ボードインコレクションに「1枚もの」写真226点を追加し、ポッターアルバムをメニューに加えました。

長崎大学
電子化コレクション

Nagasaki University
Digital Collection

附属図書館が所蔵する古写真や貴重資料をデジタル化したものが閲覧できます。
貴重資料の利用を希望の方は
こちらをご覧ください。

お知らせ

- ポッターアルバムを公開しました。

幕末・明治期 日本古写真メタデータ・データベース

幕末から明治期にかけて日本各地で撮影された写真7,000点以上を収録しています。

日本古写真超高精細画像

「幕末・明治期日本古写真コレクション」の内、長崎の写真201点、長崎を除く全国の写真300点を超高精細画像で見ることができます。

古写真 仮想展示会

平成7年度から平成9年度にかけて行われた、附属図書館に所蔵している「古写真」の全国巡回展示会で展示された写真の仮想展示を行っています。

日本古写真アルバム ボードインコレクション

A.F.ボードインが日本に滞在中に撮影および収集した古写真のアルバムであるボードインコレクションを見ることができます。

ボードイン講義録

長崎大学が所蔵するボードイン関係文献を全文ご覧いただけます。

日本古写真 マンスフェルトアルバム

A.F.ボードインの後任のオランダ人医師C.G.ファン・マンスフェルトが日本滞在中に収集した写真集です。

日本古写真 ポッターアルバム

につながり、世界各地からアクセスがあり、学術・新聞・出版・TV・広報など多方面に貢献しています。

2. 長崎と古写真

写真術は、写真機（カメラ）で支持体（ダゲレオタイプ：銀板写真は銅板、コロジオンタイプ：湿板写真はガラス板）の膜に映像を感光させ、化学溶液で媒体に固定させる技術です。そして写真とは感光膜に定着した映像です。イギリスとフランスから広がった写真術は、日本に蘭書を通して知識として伝えられました。初期の写真術はダゲレオタイプです。銀メッキした銅板に沃化銀の感光膜をつくり撮影後水銀蒸気で合金化し、ハイポ（チ

オ硫酸ソーダ)で定着する技法でした。複製はできません。長崎ではポンペの先任の出島商館医でしたファン・デン・ブルークが日本人に始めて写真術を教えました。写真機は、上野彦馬の父俊之丞が1843(天保14)年に輸入したのですが、これは使い方が分からず返送されています。1848(嘉永元)年以後写真機は度々輸入され、これを入手した薩摩藩と福岡藩が相次いで写真撮影に成功します。長崎は日本における写真術伝来の地であったわけですから。上野彦馬は江戸の鵜飼玉泉、横浜の下岡蓮杖とともに日本における写真術の開祖とされています。彦馬は日田の咸宜園で漢学を修め、ポンペのもとで蘭化学を学び写真に出会いました。スイス人写真師ピエール・ロシエと邂逅して自家製機材と薬品の不備を知り、津の藩主藤堂高猷の支援で写真機材を入手して津藩に仕え、江戸で修行しています。彦馬は蘭化学者として藩校有造館で教え、化学書から抄訳して『舎蜜局必携』(1862)を著わしました。付録の「撮形術ポトガラヒー」

は、フランスの写真機カタログの絵と、オランダ語の技術百科書を参照しています。彦馬の技法はコロジオンタイプです。文久2(1862)年秋、彦馬は中島川河畔で撮影局を開業しました。人物撮影を得意としたのですがイタリア系イギリス人写真師フェリーチェ・ベアトやとオーストリア遣日使節の随員写真師ウィルヘルム・ブルガーから学ぶことで風景写真にも習熟します。

彦馬の門下からは山口出身で京都写真の祖となった亀屋徳次郎、東京で成功する内田九一、熊本の富重利平、島原の中島寛造、東京大学で化学教室を開設した阿波の永井長義、坂本龍馬を撮影した土佐の井上俊三、大阪の守田来三、西南戦争の戦跡を彦馬と撮影した薛信二郎と野口丈一、ほかに長崎では清河磯三郎、竹下佳治、神代延祥、渡瀬定太郎、浦田多三郎などが育っています。籠町で営業していた為政虎造は横浜で鈴木真一に学び、着色写真を得意としていました。長崎は写真発祥地であるとともに写真術が発展するメッカでした。

紙焼き写真(鶏卵紙)がコロジオンタイプの場合古写真の通常形状ですが、最近彦馬のガラス種板(紙に焼付けるコロジオン・ガラス原板)やアンプロタイプ(黒布を背後に敷いて白黒を反転させるガラス焼付け写真)が発見されて、ガラスの材質や塗布された薬品の化学的・物理的分析が試みられ、撮影者の手法や材料を特定する研究も進められています。

写真2 上野彦馬 堀江鋏次郎撮影 1860年
(日本大学技術学部蔵)



3. 写真研究の楽しさと余録

こうして写真の1枚ごとに地域と世界をつなぐデータベースが公開されました。長崎で言えば、地域の歴史の解明に具体的な歴史画像がもたらされたことを意味します。長崎は写真発祥の地として多くの写真が残され、それを遡及できれば近代長崎の歴史空間はかなり精度でビジュアルに再現できます。そのような地域の歴史的空間情報は、国際的な広がりや歴史学を始め、人文社会や自然科学に研究資源を提供できることになりました。

古写真を撮ったカメラは今よりずっと大きく、画像の支持体となる大型の感光ガラスは今のエイトバイテン（8×10インチ）より大きいものでした。したがって画像の解像度が高く、ズームアップしても画像が乱れません。さらに習熟した職業的写真師が撮影するわけですから、古写真の画像は品位が保たれています。また横浜写真と呼ばれた外国人向けの写真は着色されています。これは蒔絵の絵付けの伝統を継承しています。これにより横浜写真は現在のカラー写真と見違える程の秀麗な写真となっています。

長崎大学はこの30年間、古写真コレクションの追加に努めてきました。長崎大学の前身小島養生所・医学所（精得館）の2代目校長フランシスカス・ボードインのご子孫から譲っていただいたボードイン・コレクションは、2008年に電子化されて公開されました。日本で最初の英字新聞 *Nagasaki Shipping List and Advertiser* の電子化公開は2012年でした。

3代目の校長コンスタント・ジョージ・ファン・マンスフェルトのアルバムの公開は2015年、2017年には高島炭坑の鉱山技師フレデリック・ポッターのアルバムを公開しています。

古写真研究は撮影者や撮影場所、撮影時期、撮影対象、撮影意図などを解明するのにパズル解きの難しさと楽しさがあります。そのうちの一つが解明されると三つくらいの新しい疑問が湧いてくるわけです。このような古写真研究の楽しみとなる謎解きが続けているなかで、展覧会の開催や、新聞社の取材や、テレビ局からの番組制作への協力依頼が来るわけです。この対応により古写真研究の裾野が広がりました。大学校内だけではなく長崎歴史文化博物館はじめ百貨店の浜屋、長崎市民図書館などで古写真展を開催し、市民のなかに古写真の認知を高めることができました。また2007年6月から2013年3月までの5年半、朝日新聞の長崎版に古写真解説として「長崎今昔」を連載し、古写真のパズル解きの楽しさを読者と共有するという経験をしました。これは『龍馬が見た長崎：古写真が語る幕末開港』朝日新聞出版（2009）と『古写真に見る幕末明治の長崎』明石書店（2014）として本にまとめています。

彦馬の弟子だった森山良子さんの曾祖父国蔵の縁で、NHKの「ファミリーヒストリー」の制作に協力しました。「秘密のケンミンSHOW」、や北野武さんらのFNS「27時間テレビれきしスcoop大賞」、関口知宏さんとの「古写真が語る日本観光の夜明け」、フリー

アナウンサーの宮本隆治さんと共演したTNC「土曜ニュースファイルCUBE」などは番組協力の事例です。全国放送の人気テレビ番組の制作に荒っぽさを感じるものがあるのですが、2015年4月に放映された第1回ブラタモリ「～“坂の町・長崎”の始まりとは？～」は、ディレクターが作りこんでお笑い系に演技させるという従来の番組作りを転換させたのではないのでしょうか。芸人タモリさんの高低差という地理的目線の確かさと直感力、スタッフと研究者の協力による綿密な調査取材、ディレクターのエンターテインメントとしての企画力といった三者が組み合わさった、見事な番組作りから大いに学びました。

写真3 第1回ブラタモリロケにて



4. 研究の先端：電子図書館から ユビキタス図書館へ

古写真研究の先端として、デジタルヒューマニティーズ（人間情報学）と長崎古写真ハンティングの取り組みがあります。長崎大学附属図書館は、古写真をデジタル化することで電子図書館を目指してきました。本と画像がデジタル化され、目録が検索ソフトに連動

し、カウンターはPC画面になり、書庫がデジタルアーカイブになるわけです。図書館のAI（人工知能）化と言ってもよいでしょう。これは人文社会の研究分野に革新をもたらしはじめています。まずコンピュータと人文社会を結びつけるデジタルヒューマニティーズとは、人文社会の教育・研究における調査、分析、研究、教育、総合、考察およびプレゼンテーションと、電子出版、コンピュータ分析、プロジェクトデザイン、ビジュアライゼーション、データの記録保存および検索を手がける専門家とを結びつけるものです。ここでオープン化された図書や文書、画像のデジタル情報は所蔵機関や特許、専用プログラムから離れて一般公開され利用されます。データはオープンなデータとして研究者に無料で提供され、カスタマイズされ、相互に再利用可能なかたちで標準化されるものです。

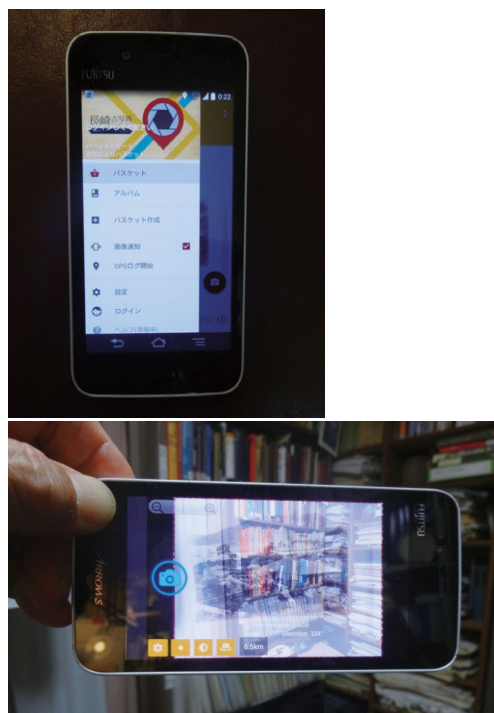
長崎大学では、2015年度に国立情報学研究所の「情報学の知見を活かした人文社会科学古典デジタルテキスト分析の研究開発」の共同研究に参画し、オランダで人文学の文献のデジタル化に取り組むインヘル・レーマンス教授を招いてデジタルヒューマニティーズのワークショップを開催しました。これは人文社会研究におけるデジタルデータの共同利用を探るものでしたが、長崎をはじめ各地に所蔵される南蛮学や蘭学、洋学、国学、漢学など、長崎学に関する歴史資料のデジタルオープン化という課題を浮かび上がらせました。

さらなる取り組みは長崎古写真ハンティングの取り組みです。これはユビキタス（どこ

からでも)な情報利用の環境の中で、利用者にとっては受身の電子図書館の限界を超えて、利用者が主体的に情報に働きかける実験です。「ポケモンGo!」によってAR (Augmented Reality: 拡張現実) は有名になりました。ARはコンピュータ・グラフィック (CG) により仮想空間にキャラクターを創作し、スマートフォンでこれを探すものです。古い写真を見たとき、この写真はどこの景色を撮影したものだろうと疑問に思うことがよくあります。有名な場所ならすぐにわかるかもしれませんが、時代とともに風景が大きく変化した場所だと、すぐにはわからないかもしれません。一番いいのは、現地に行って過去の風景と現代の風景を見比べて、もっとも両者が一致する場所を探すことです。しかし、写真を印刷して (あるいはパソコンの画面に表示して)、自分の目で見える視界と見比べることは、厳密には簡単ではありません。

私たち長崎外国語大学の「メモリアル・リアリティ」(MR) 開発は、現実のなかに古写真の撮影場所をスマホで探索する試みです。国立情報学研究所の北本朝展准教授と共同し、観光利用を目指して長崎市から産業創生事業の補助をいただきスマホアプリの「長崎古写真ハンティング」が開発されました。これは、古写真に残る過去の風景をスマホに取り込み、ファインダー上に半透明で重ねることにより、現場と古写真をファインダー上で直接的に比較できるものです。古写真に残るメモリアルな場所を現場でハンティングし (MH)、記憶を記録する (メモリアル・グラフィック:

写真4 スマホアプリ「長崎古写真ハンティング」の画面



MG) 道具です。アイデア自体は単純ですが、スマートフォンのようにカメラのファインダーを自由にプログラミングできる環境によって、初めて実現できる創生的なアイデアです。このスマホアプリ「長崎古写真ハンティング」は、観光地周遊に利用するため長崎国際観光コンベンション協会が主催する「学さるく」で実証実験を続けています。

AIに進化する将来の図書館は、デジタル・デバイスを用いることでユビキタス (どこでも) な「空間図書館」になるはずです。長崎外国語大学の新長崎学研究センターでは長崎学に対する寄附をいただき古写真収集を継承するとともに、このような「ユビキタス図書館」を構想しています。

「長崎大学電子化コレクション」

<http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/siryo-search/ecolle/>